



菊池寛著

父帰る
恩讐の彼方に

A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

父帰る……………	5
恩讐の彼方に……………	27
忠直卿行状記……………	81
藤十郎の恋……………	139
三浦右衛門の最後……………	173

父帰る

人物

黒田賢一郎	二十八歳
その弟 新二郎	二十三歳
その妹 おたね	二十歳
彼らの母 おたか	五十一歳
彼らの父 宗太郎	

時

明治四十年頃

所

北海道の海岸にある小都会

情景

中流階級のつつましやかな家、六畳の間、正面に簞笥があつて、その上に目覚時計が置いてある。前に長火鉢あり、薬缶から湯気が立っている。卓袱台ちゃぶだいが出してある。賢一郎、役所から帰って和服に着替えたばかりと見え、寛くわんいで新聞を読んでいる。母のおたかが縫物ぬいものをしている。午後七時に近く戸外は闇くらし、十月の初め。

賢一郎 おたあさん、おたねはどこへ行つたの。

母 仕立物を届けに行つた。

賢一郎 まだ仕立物をしとるの。もう人の家うちの仕事やこし、せんでもええのに。

母 そうやけど嫁入りの時に、一枚でも余計ええ着物を持って行きたいのだからわい。

賢一郎 (新聞の裏を返しながら) この間いうとつた口はどうなつたの。

母 たねが、ちいと相手が気に入らんのだらうわい。向こうはくれくれいうてせがんどつたんやけれどものう。

賢一郎 財産があるという人やけに、ええ口やがなあ。

母 けんど、一万や、二万の財産は使い出したら何の役にもたたんけえな。家でもおたあさんが来た時には公債や地所で、二、三万円はあつたんやけど、お父さんが道楽して使い出したら、笹につけて振るごとしじゃ。

賢一郎 (不快なる記憶を呼び起したるごとく黙している) ……。

母 私は自分で懲々しとるけに、たねは財産よりも人間のええ方へやろうと思つとる。財産がのうても、亭主の心掛がよかつたら一生苦勞せいで済むけにな。

賢一郎 財産があつて、人間がよけりや、なおいいでしょう。

母 そんなことが望めるもんけ。おたねがなんぼ器量よしでも、家には金がないんやけにな。この頃のことやけに、少し支度をして三百円や五百円はすぐかかるけのう。

賢一郎 おたねも、お父さんのために子供の時ずいぶん苦勞をしたんやけに、嫁入りの支度だけでもできるだけのことはしてやらないかん。私たちの貯金が千円になつたら

半分はあれにやつてもええ。

母 そんなにせいでも、三百円かけてやつたらええ。その後でお前にも嫁を貰うたわしも一安心するんや。わしは亭主運が悪かつたけど子供運はええいうて皆いうてくれる。お父さんに行かれた時はどうしようと思つたがのう……。

賢一郎 (話題を転ずるために) 新は大分遅いな。

母 宿直やけに、遅うなるんや。新は今月からまた月給が上るといつた。

賢一郎 そうですか。あいつは中学校でよくできたけに、小学校の先生やこしするのは不満やろうけど、自分で勉強さえしたらなんぼでも出世はできるんやけに。

母 お前の嫁も探してもろうとんやけど、ええのがのうてのう。園田の娘ならええけど、少し向うの方が格式が上やけにくれんかも知れんぞな。

賢一郎 まだ二、三年はええでしょう。

母 でもおたねをほかへやるとすると、ぜひにも貰わないかん。それで片が付くんやけに。お父さんが出奔した時には三人の子供を抱えてどうしようと思つたもんやが……。